

9. 最高の思い出

各務原市立川島小学校6年

鈴木 遥



敦賀市立松原小学校6年

中者 和香奈

「キャー」

「えいっ」

「ひゃっ、つめた〜」

「わっ、くつ、べっとべと」

今、雪がっせんをしているのは、ふたごの姉の亜夢（あむ）と妹の夢羽（むう）と、二人のとなりの家で幼なじみの絵夢（えむ）と、三人の手前の家に住んでいる羅夢（らむ）です。

亜夢たちと絵夢はようち園に入る前からの幼なじみで、羅夢はようち園の年長の時に引っこしてきました。5年生になった今では、四人とも大親友です。

「えいっ」

羅夢が、雪をなげました。それが見事に亜夢の顔面にめいちゅうして、亜夢がふらふらしながら、ぼーっとしていた夢羽にぶつかって、二人とも転んでしまいました。

「あいたたたたた」

夢羽が、言いました。

「大丈夫？」

絵夢と羅夢がかけよってきました。

「いてて。いくらなんでも、あれはやりすぎだよ羅夢〜」

「アハハ、ゴメン。本当にゴメンネ」

「もうっ、いいやー」

「アハハハハハ」

と、二人が笑っています。

「あ〜、なにこれ！」

夢羽が言いました。

「なになに？ どうしたの？」

他の三人が夢羽の近くに集まりました。

「ほらーこれー、なにかが光ってるよー」

と、夢羽が言いました。

「よくわからないけど、ほってみよーよ」

どこから持ってきたのか分からないけど、絵夢がスコップを持っていました。しかも四人ぶんです。

「……………」

三人は、ぼうぜんとして、なにもつっこみようもなく、なんと言えればいいんだろうと

思いました。

「ねーねー、はやくやろうよー」

と、絵夢が言ったので、まず光ってるものをほってみることにしました。

するとピンが出てきました。中には、なにか入っているようです。

「なにが入っているのかな？」

「あけてみよーよ」

と、羅夢が言って、開けることにしました。なかには、地図と手紙が入っていました。

『手紙を見た者へ

宝は、地図にも場所が書いてあるが
チョコ通りの近くの、ミントの湖を、
真っすぐいった所にあるぐるぐる山
のてっぺんにある』

と、書いてありました。

四人で相談して、明日、お弁当を持って出かけることにしました。

四人とも、明日を楽しみにしながら家に帰って、いつもより早くねました。☆

朝、いつもより寝たせいなのか四人とも早く目が覚め、そして、お弁当を用意して集合場所に行きました。四人がそろそろさっそく、話し合いを始めました。

「そういえば、この近くにこんな場所があったかな」

亜夢が手紙の文字を指さして言いました。

「あっ、あそこに何か書いてあるよ」

夢羽が言いました。見ると、

『おかしの国に宝がある』

と、手紙の最後に書いてありました。

「おかしの国……」

思わず四人とも大声で言いました。

「でも、どうやって行けばいいんだろう」

羅夢が言いました。

「とりあえず外に出て手がかりを探してみよう」

と、絵夢が言いました。四人とも賛成して外に出て手がかりを探すことにしました。

しばらく歩くと、大きな木の近くに七色に光る池がありました。四人は池のそばに行き、

「きれいだね」

と、みとれていました。

ところが、四人とも何者かに背中を押されて、池に落ちてしまいました。気がつくと、まわりは〈キャンディーの花〉〈わたあめの雲〉そう、おかしの国だったのです。

「わ～おいしそう」

夢羽がキャンディーを持ちながら言いました。

「すごっ、おかしの国だ〜」

羅夢が言いました。

「そこにいるのはだれ？」

ふりむくとそこには、チョコレートのような男の子が立っていました。

「だれ？」

と、亜夢が訪ねると、

「ぼくは、チョコ。それより君達は どうしてこんなところに？」

四人は、チョコに訳を話しました。

「それはたぶん、むっくるの仕業だよ」

「むっくる？」

「そう、むっくるとはいたずらが大好きなとっても困ったやつなんだ」

「もしかしたら、これから私達が行くところにも、いたずらがしかけられているかもしれないね」

と、羅夢が言いました。

「どうしても宝物を探しに行くの？」

チョコが、言いました。

「うん、絶対！」

と、四人が言いました。

「それなら、気をつけるんだよ」

チョコが心配そうに言いました。

「ありがとう。じゃあ行って来るね」

「絶対に宝物を見つけるよ」

「行ってきまーす」

「ありがとう。がんばるよ」

四人が口々に言いました。

しばらく歩くと絵夢の目に何やら茶色の道が見えてきました。

「あっ」

「どうしたの絵夢？」

「あそこに茶色の道がある」

絵夢が指さしました。

絵夢が、指さした方向を見るとチョコの通りが見えました。

「手紙に書いてある通りだね」

と、亜夢が言いました。

「早くミントの湖を見つけないと……」

四人は、急ぎましたが足を踏み外し、真っ暗な所に落ちてしまいました。

「いった〜い。ここは？」

「ここは、洞窟みたいだよ」

と、羅夢が言いました。

「早くミントの湖を見つけようよ」

夢羽はそう言って先に進みました。

「待ってよ夢羽……」

三人も夢羽を追いかけました。

「あっ」

「どうしたの夢羽？」

と、三人が聞くと、

「ミントの湖だ」

と、夢羽が言いました。

「ということは、ここを真っすぐに行ったところにぐるぐる山があるんだね」

と、羅夢が言いました。

「よ～し、ぐるぐる山を目指して真っすぐ行こう」

絵夢が言いました。

しばらく歩くと、まぶしい光が見えました。

「出口だー」

四人は出口の方へ走って行きました。

すると、大きなソフトクリームが立っていました。その上には宝物が置いてあります。

「みんな、さっそく登ろうよ」

夢羽が言いました。四人は、さっそく登ってみました。

「うわー ベタベタするよ」

亜夢が言いました。

いつの間にかソフトクリームの山は溶け出していたのです。

そこで羅夢はとなりに浮いていたわたがしの雲に乗りました。

すると、不思議なことに乗っても雲から落ちませんでした。そこで三人にも雲に乗るようと言いました。

どんどん溶け出したソフトクリームの山の上にある宝箱が近づいてきました。それを夢羽が受け取りました。四人は雲から飛び下りました。

そして宝箱を開け、中を見てみました。

それを見た四人は、驚きのあまり声が出ませんでした。

なんと、箱の中には何も入っていませんでした。

しばらくして、亜夢が言いました。

「べつにいいんじゃない。楽しかったし」

「そうだね」

三人もそう言いました。

そして四人は、地図を見て七色に光る湖を見つけ、そこに行き、もとの国にもどりました。

そのとき四人は、気がつきませんでした。宝物はもらえなかったけれど、目には見えない宝物をもらったことに。

「思い出」というとても大切な宝物をもらったことに……。